日本人EFL学習者の教育背景が言語運用能力に及ぼす影響
－上級レベル学習者の分析比較より－

吉田 安曇

１．はじめに

現在日本では、早期外国語（英語）教育の推進が加速する一方、その教育的効果に警鐘を鳴らし、母語教育との連携を求める声も多い（大津、2018・鳥飼、2020）。このような状況を受け、母語教育及び早期外国語教育が外国語習熟度に与える影響を明らかにすることが求められている。本稿では、異なる教育背景を持つ上級レベル学習者２名のエッセイライティング及び英訳・和訳の文体的特徴を分析することで、母語教育と早期英語教育の効果について検証していく。また、彼らのパフォーマンスを詳細に分析することで、語彙・文法等に加えて、文体の習得についても検証していく。

本研究の目的は、日本人 EFL（English as a Foreign Language）学習者の言語運用能力を文体論的視点から分析し、母語能力と外国語習熟度との関連性について考察することであり、以下の２つの問いに対する検証を試みた。①早期外国語教育の効果とは何か、②幼少期の母語教育は外国語習得にどのような影響を与えるか。なお、本研究では、猪原（2016）による読書量と日本語能力の相関性に関する研究を参考に、幼少期の読書を母語教育の指標として設定した。また早期英語教育は英会話スクール等での私的な学習とし、小学４年生までに開始したものと定義する（Djigunović, 2010 参照）。

２．先行研究

本研究に関連する先行研究は、①早期外国語教育に関する研究、②母語（L1）と外国語（L2）教育の相関性に関する研究、③メタ言語能力に関する考察、に分類される。①に関しては、豊永・須藤（2017）が、小学１・２年生で英語学習を始めた場合、中学生になってからの英語学力に正の効果をもたらす可能性を示唆している。一方、②の代表である大津（2007）、斎藤（2017）等は、早期英語教育に消極的な立場を取っており、母語の確立こそが優先されるべきであると論じている。しかし、現時点では、母語による読書が外国語学習に及ぼす影響について論じる研究は依然として少なく、さらに、早期英語教育と母語教育の優先についての議論も未だ決着がついていない。したがって、今後さらなる実証研究の積み重ねが不可欠である。③については、秋田他（2019）が、２つ以上の異なる言語間におけるメタ言語能力の習得により、学習者がそれらの言語を比較し、個々の言語の相関性をよりよく理解することを可能にすると説いている。また、その結果、母語と外国語双方の知識を有することにより言語学習をより充実させることができると論じている。これらは、学習者のメタ言語能力がL1/L2の運用能力にどのように関わっているのかを論じる上で非常に示唆深い主張であるが、実際にEFL学習者のライティングや翻訳等を詳細に分析し、母語と外国語運用能力の関連性を検証する必要が

ある。また、L2による読書体験の効果やL1の読書体験欠如の影響等についても、今後さらに研究を進める必要があると考えられる。

３．実験の目的と方法

本研究では、早期言語教育と外国語習熟度との相関性を検証するために、日本人 EFL 学習者に対し英語課題を実施した。課題の内訳は、英訳（小説２問・論説文２問）、和訳（小説２問・論説文２問）、及び２つのエッセイライティング（What are benefits and down sides of hosting the Olympic Games? / Describe the situation in 200 years from now.）であるが、本稿では対照的な教育背景を持ちながら、同程度の高度な英語力を保持する２名の協力者のエッセイ及び英訳・和訳の分析を詳細に取り上げる。なお課題中の各設問は、順序効果を排し問題への意欲のむらを制御するため、被験者ごとにランダムに配置した。また、辞書の使用は認めないが、時間制限は設けなかった。実験の方法としては、まず、①主に大学生・高校生を中心とした 79 名にアンケート調査及び英語課題を実施、②課題を完全に解くことのできた 17 名を抽出、③同時に実施した幼少期の読書体験と現在の英語力に関するアンケート（注１）結果より、母語教育及び早期英語教育の有無に基づき協力者を分類し（①～③まで、Yoshida et al., 2022 参照）、④英語課題を文体論的視点から分析、最後に、⑤分析結果より、協力者の教育背景を示唆する特徴等について考察した。英語課題の分析は、英語学習及び英語教育経験のある研究者（筆者）が実施し、母語教育や早期英語教育の影響が現れているかどうかの検証を試みた。特にエッセイでは、語彙・文法・構文の正確さやバリエーション、レジスターや論理の展開の特徴について、教育的文体論（豊田他、2017）を援用し分析した。なお、２名の上級レベル学習者の基本データについては Table 1 を参照のこと。

Table 1　２名の上級レベル学習者の基本データ

	学年/職業	資格	幼少期、読書が好きでしたか？	今、英語が得意ですか？	英語学習を始めた年齢
A	公立大学 ３年生	英検１級 TOEIC 970	とても好きだった（伝記・ドキュメンタリー等）	とても得意	中学入学以降
B	公立高校 １年生	英検１級	とても好きだった（L2での読書）	とても得意	３－５歳

これら２名の協力者は英語習熟度が非常に高く、いわゆる「英語学習の成功者」であると思われるが、彼らが用いる語彙・文法、さらには文体の特徴について分析することにより、異なる教育背景が外国語習得に及ぼす効果について検証できると考える。

４．分析結果

本項では、上級レベル学習者である協力者 A・B の分析に焦点を当て、エッセイライ

ティング及び英訳・和訳の文体的特徴を提示する。

４．１　エッセイライティング分析

本稿では、紙幅の関係上、２つのエッセイトピックのうち、‘Describe the situation in 200 years from now.’ についての分析を以下に取り上げる。

４．１．１　協力者A

まず、協力者A（母語による読書あり・早期英語教育なし）の分析について見ていく。エッセイの抜粋については、間違いは訂正せずに原文のまま引用し、また各文章には説明の便宜上、番号を振る。

> (1) No one can not predict what happens in 200 years as the people in 1800s failed to do so. (2) I believe, however, to foretell the future is not impossible in some specific areas. (3) Therefore, I'll describe what I think will happen in 200 years.
>
> (4) First of all, in terms of climate condition, 2020s will be more ominous than today. (5) As most experts in meteology put it, our planet have been getting warmer and warmer. (6) Excessively, high temperature will demolish entire ecosystem including our habitat. (7) Unless people in present days invent some state-of-art technologies that are so cutting-edge that current environmental problems such as the density of CO_2 or the rising in sea level can be solved, what will wait us is noting but a dismal consequence.
>
> (8) In addition, I also expect the future when over-populated society will no longer be sustainable. (9) No one can deny the principle that the more people there are, the more food supplies we need. (10) Since few lands are already left to raise cattles and plants, the dearth of food will be inevitable.

この協力者のエッセイは、全体的に非常にフォーマルな語彙が使用されている。例えば、‘ominous’ (4)、‘demolish’ (6)、‘entire’ (6)、‘dismal’ (7)、‘inevitable’ (10)といった、ラテン語由来の語彙が頻繁に用いられているところは、他の協力者にはあまり例の見られない特徴である。オーラルコミュニケーションスキルの育成に重きを置く日本の早期英語教育においては、難解な語彙の使用を避ける傾向にあることから、協力者Aの中学入学以降の、いわゆる「受験英語」的な英語学習の影響が反映されているとも言える。また、この協力者の１文当たりの平均語数は19.7語（全体平均14.5語、同グループ平均16.1語）であり、重複文や複文の使用等、文章自体も長く複雑である。さらに、‘not impossible’ (2)や ‘not(h)ing but’ (7)に見られる二重否定の使用により、明確な断言を効果的に避けることができている。また、‘what will wait us’ (7)の無生物主語は、ある意味擬人化と捉えることもできる。このような巧みな表現や文章応用力を考慮すると、この協力者の

言語運用能力が、幼少期の母語での読書によって培われた可能性がある。その一方、文(5) 'Our planet have been' に見られる文法ミス、同じく(5)の 'meteology' におけるスペルミス、(10)の 'cattle' を複数形で使用する等、比較的初歩的な間違いも見られる。さらに、文法的には正しいが、実際にはあまり用いられない表現も見られた。例えば、(7)の 'so cutting-edge' は、コーパス（COCA）上ではわずか 7 例しか挙がっていない独特な表現である。これは文法規則の過剰一般化ともいえる一方、この協力者の独創性とも捉えられる重要な特徴であり、今後さらなる検証が必要である。

４．１．２　協力者B

次に、協力者 B（英語による読書あり・早期英語教育あり）について見ていく。この協力者は、5 歳から 10 歳までの約 5 年間をアメリカ合衆国で過ごし、地元の公立校に通学していた。滞在期間中は、日本語での読書をほとんど行っておらず、主に海外小説等の英語での読書経験を持つ。また、高校 1 年生と最年少であるが、英検 1 級を保持する上級レベル学習者である。L1 での読書体験が皆無というわけではないが、協力者 A に比べると圧倒的に少ないのは事実であり、幼少期の教育環境に関しては対照的な学習者と位置付けられる。この協力者のサンプルを分析することで、L2 による読書が外国語習熟度に与える影響や、今後我が国においてますます増加すると見込まれる「帰国子女」への指導法等について有益な示唆が期待できる。協力者 B のエッセイは次の通りである。

(1) In 200 years, it will be year 2220. (2) It can be easily estimated that the world will have changed a lot from now. (3) I will describe my estimation of the world in several aspects, which are culture, science, human beings, situation of Japan, and the world.

(4) First, culture diversity will decrease in the future. (5) Even now, cultures of ethnic minorities are vanishing. (6) This is because many ethnic people change their lifestyles to modern lifestyles in the city. (7) So the number of people preserving their minor culture and language are decreasing. (8) This happens because of globalization. (9) So the same phenomenon is likely to happen with major cultures as well. (10) Therefore, the unique lifestyle of places all around the world are all becoming to be similar with each other.

(11) Second, there will be changes in technology and the lives of human beings. (12) Today, the history or mechanism of certain things remains unknown and cannot be demonstrated. (13) However, science will develop to the point where almost everything that exists in this universe can be explained by science. (14) A lot of things about us humans will be revealed as well, so the human lifespan will increase greatly. (15) Also, AIs will be developed. (16) This will take away many jobs from humans, changing our lives extremely.

(17) Third, the situation of Japan will change as well. (18) Japan is already a super aging society with fewer children. (19) But because of advances of medical technology and the lifespan increase, Japan will be an even more super aging society with yet fewer children. (20) This would be stressful situation for the young having to take care of the large number of the elderly. (21) The country will have to rethink the pension system to maintain society.

(22) Fourth, the situation of the world will also change greatly. (23) The population will have decreased by 2220. (24) This is because in the past, humans had to maintain a high birth rate in order to survive famines or wars. (25) However, since people will not have to worry about their survival in their daily lives than before, the birth rate will steadily decrease.

この協力者のパッセージは、345語と全協力者の中で最も長く、また、‘estimate’ (2)、‘vanish’ (5)、‘demonstrate’ (12)、‘famine’ (24)といったラテン語由来の語の使用が見られ、他の高校生協力者と比較しても、語彙のバリエーションに富んでいる。モダリティに関しては、‘will’ 以外にも ‘is likely to’ (9)や ‘would’ (20)等が使用され、この協力者が不確かさの表現を適切に表現できる知識を有していることが分かる。また、‘will have to’ (21) や ‘will not have to’ (25) といった組み合わせの使用も適切であり、未来の可能性に関しての断定を避け、微妙な表現に留めることに成功している。これらのライティングスキルを協力者Bの年齢で習得することは、日本の義務教育現場での英語学習のみでは恐らく困難であろうと推測される。したがって、幼少期におけるL2での読書が、この協力者の英語運用能力に大きく影響していることが考えられる。さらに、文(2) (23)に見られる未来完了形の使用についても注目したい。一般的に、日本人EFL学習者にとって未来完了形は完全に理解するのが困難である複雑な文法事項と言えるだろう。事実、本研究の協力者のうち２名しか未来完了形を使用した例がなかったことから、協力者Bが英語での読み書きに慣れ親しんできたという教育背景が示唆される。また、協力者Bの英語習熟度の高さを最もよく表しているのは、文(13)であろう。まず、‘to the point where’ という表現であるが、‘to the point’ という慣用表現と関係副詞 ‘where’ との組み合わせは、他の協力者のサンプルには見られない上級レベルの語彙使用である。実際、関係副詞は一般に高校英語で学習する文法項目であり、かなりの数の日本人EFL学習者が、その正確な使用に困難を抱えている。他のエッセイでもわずか１つしか使用例がなかった。また、副詞の ‘almost’ や関係代名詞の ‘that’ も、正確かつ効果的に使用されている。さらに、混文という違った文型が１つの文の中に混在する複雑な構文を用いているのにもかかわらず、文章が自然で理解しやすい印象を受ける。しかし、文(7) (10) において、複雑な主語を巧みに使いこなす一方で、それを受けるbe動詞が ‘is’ ではなく ‘are’ になっているなど、一般的にも犯しやすい文法ミスが認められる。さらに、(9) (14) (17) の ‘as well’ 等、同じ語句の繰り返しが見られ、パッセージの新鮮味をやや欠いている。また、

第２段落以降、‘first’‘second’‘third’‘fourth’ という副詞の羅列による段落の展開が機械的な印象をもたらすことから、文体的技巧に関しては改善の余地があると言える。

４．１．３　まとめ

協力者Aは母語のスキルを英語の語彙・文法等に効率良く転換させているように見受けられた。また、正確で丁寧な文章を書き、フォーマルな文体が用いられていた。この点については、協力者Aは海外留学希望者でもあり、資格試験のための学習が彼の文体に何らかの影響を与えた可能性も考えられる。例えば、同じ語彙・表現の繰り返しを避け、バリエーションを持たせるといった技巧は、TOEFLのライティングでは重視される点である。しかし一方で、文章や語彙が堅すぎてやや不自然な印象も受けることから、母語能力が英語的発想のスタイルや、より自然で慣用的な表現の使用を妨げている可能性があることも示唆された。

次に、協力者Bであるが、英語でのライティングに慣れており、課題にも積極的に取り組んでいる印象を受けた。また、英語独自の慣用表現等が正確に用いられており、自然に英語を操ることができていた。これらの結果から、この協力者が英語表現にある程度精通しており、L2での読書が英語習熟度に有意な影響を与えたことが推測される。今後は、協力者Bのように英語習熟度の高い学習者がさらに洗練されたアウトプットができるよう、文体論的アプローチによる専門的なライティングテクニックの指導の重要性が示唆された。

４．２　英訳分析

続いて、『容疑者 X の献身』（東野圭吾、2005）の和訳についての分析結果を提示する。作者の東野は若年層にも人気があり、またこの作品のシリーズはドラマ・映画化もされており知名度が高いことから、題材として選別した。本稿では、エッセイライティングのみならず EFL 学習者の英訳を分析することにより、原文の日本語表現を正しく把握し英訳できているか、文法や語彙選択に誤りがないかといった点に加えて、適切な文体や細かなニュアンスへの注意がどの程度なされているかについて検証していく。分析に関しては、翻訳文体論の手法（Boase-Beier et al., 2018）を援用し、まずは日本語原文を精査することによって、英訳する際、特に注意が必要な点を挙げていき、それらがどのように訳文に反映されているかを詳細に見ていく。

『容疑者 X の献身』からの抜粋文と訳文（Alexander O. Smith 訳）は以下の通りである。なお、協力者には作品及び作者名が開示されており、下線部分のみの英訳を提示する。

> 彼女たちとどうにかなろうという欲望は全くなかった。自分が手を出してはいけないものだと思ってきた。それと同時に彼は気づいた。<u>数学も同じなのだ。崇高なるものには、関われるだけでも幸せなのだ。名声を得ようとすることは、尊厳を傷つけることになる。あの母娘を助けるのは、石神としては当然のことだった。彼女</u>

たちがいなければ、今の自分もないのだ。（東野、2005: p.345）

It was like his relationship with mathematics: it was enough merely to be associated with something so sublime. To seek any kind of acknowledgement would sully its dignity. Yet when trouble arrived and they needed help, it was only natural for Ishigami to go to their aid. After all, if they hadn't been there for him, he would no longer be alive. (Smith, 2011: p.430)

日本語原文はさほど難解な語彙・表現を含んでいるわけではないが、語り手が石神の視点から彼の気持ちを代弁するという自由間接話法（斎藤、2000・Nasu, 2017 等参照）が用いられている。自由間接話法においては、語り手と登場人物の間で視点が入り乱れ、英訳での適切な時制の使用が非常に難しい。例えば、最後の文章の「彼女たちがいなければ」という部分は、日本語だけに注目すると仮定法過去で問題なさそうであるが、実際には、語りがずっと過去形で行われている以上、仮定法過去完了を使用するのが適切である。さらに、難解な文法事項の一つである仮定法を正しく使いこなせているかどうかが、最大のポイントであると言える。

４．２．１　協力者A

協力者A（母語による読書あり・早期英語教育なし）の英訳は以下の通りである。なお、訳文には説明の便宜上、番号を割り振っている。

(1) Mathmatics is also the same. (2) Just to be able to have some relationships with admirable things is happy. (3) To obtain privilige and to acquire privilige are trade-off. (4) Ishigami took it for granted to help the daughter and the mother; if it were not for them, he would not exact here.

文(3)における 'privilige' という語の選択、また、文(4)の '当然のことだった' という部分において、他の協力者の多くが 'natural' という語彙を使って表現していたのに対し、より難易度の高い 'took it for granted' を使用している点等を考慮すると、協力者Aの語彙力の高さが推測される。さらに、文(4)のセミコロンの活用においても、この協力者の表現の豊かさ、独創性、英語習熟度の高さが示唆されている。文(2)においては、'to be able to have some relationships with admirable things' という無生物を主語(S)に置き、be 動詞(V)と補語(C)という構文を取っている。しかし、形容詞 'happy' は、通常、人を主語に取って使用することから、この組み合わせはややぎこちなく感じられる。さらに、文(1)の 'Mathmatics'、文(3)の 'privilige'、文(4)の 'exact'（'exist' の間違い）等のスペルミスも見られる。また、文(3)における 'privilige' の繰り返しが、意味の重複や単調さに繋がっていることは否定できない。同文の 'trade-off' は、「何かを得ると、別の何かを失う、相容れない関係のこと」という意味で使用されているものと推測され

るが、原文の「尊厳を傷つけることになる」という意味とはニュアンスが変わってしまい、正確な訳文とは言えない。しかしながら、この表現は一般的な EFL 学習者にはあまり馴染みがなく、協力者 A の語彙力の高さを裏付けているとも言える。最後に、この協力者の英訳は基本的に現在形で語られ、特に文(4)においても、仮定法自体は正確に使用できているが、仮定法過去完了ではなく仮定法過去が用いられていたことから、自由間接話法が正しく解釈されていたとは言えない。したがって、日本語と英語では人称と時制の扱いが異なるというメタ言語的知識を踏まえた意識的な文体の習得が期待される。

４．２．２　協力者B

続いて、協力者B（英語による読書あり・早期英語教育あり）の英訳について見ていく。

> (1) It is the same with mathematics. (2) For someone who is grand, it is happy just to have some kind of relationship with them. (3) To win fame means to hurt dignity. (4) It was natural for Ishigami to save the mother and daughter. (5) If it weren't for them, he wouldn't be the way he is right now.

まず、文(1)の主語を 'mathematics' とせずに 'It' としたところに、この協力者がより英語らしい自然でこなれた表現を習得していることが推測される。また、文(5)において、'今の自分もないのだ' という部分を 'he wouldn't be the way he is right now' と表現しているが、'who I am' や 'what he is' 等、関係代名詞の 'who' や 'what' を使用した協力者はいたが、協力者 B の 'the way' は、他には見られない独特の表現である。これは、この協力者の独創性や英語的な発想でのパフォーマンスの結果と言えよう。しかし一方で、文(2)において、協力者 A 同様、'it' と形容詞 'happy' の組み合わせが見られる。また、'崇高なるもの' に当たる訳語が見られないが、これは恐らく日本語の 'もの' を '物' ではなく '者' と勘違いしたのではないかと推測される。その結果が、'For someone who is grand' という英訳に繋がり、全体の意味を捉えにくくしているものと推測される。文(3)では文法が正しく使用されており、大きな問題はないが、'得ようとする' というニュアンスの表現が十分であるとは言えない。日本語のより細かなニュアンスへの配慮ができていれば、より正確な表現に近づいたのではないかと考えられる。最後に文(5)であるが、通常高校中盤以降で学習する仮定法の構文 'it weren't for' を、高校１年生である協力者 B が正確に使用できていることは、評価に値する。しかし、協力者 A 同様、自由間接話法の解釈については改善の余地が見られた。

４．２．３　まとめ

英訳においては、双方の協力者に共通して、ややぎこちない表現やコロケーション等が見られた。また、上級レベルの学習者であっても、自由間接話法の正しい解釈は非常に難解であることが示唆された。その一つの理由としては、英訳する際、下線部のみに注目し、「彼女たちとどうにかなろうという欲望は全くなかった。自分が手を出しては

いけないものだと思ってきた。それと同時に彼は気づいた。」という前半部分への注意が疎かになっていたことが考えられる。この部分を正しく解釈すれば、語りが基本的に過去形で行われていることに気付き、英訳にも適切な時制の選択が反映されていた可能性がある。翻訳をする際、特に文学作品においては、前後の文脈を吟味し行間を読むスキルが必要であることが示唆された。

４．３　和訳分析

最後に、『日の名残り』（*The Remains of the Day*, Kazuo Ishiguro, 1989, 土屋政雄訳）の和訳についての分析結果を提示する。作者の Kazuo Ishiguro は、ノーベル文学賞を受賞して以来、日本での知名度が大きく上がった。さらに、この作品は Ishiguro の代表作とも言えることから、題材として選別した。ただし、『容疑者 X の献身』に比べると、和訳版であれ、作品を読んだことのある協力者は少ないかもしれない。本稿では、EFL 学習者の和訳を分析することにより、L1/L2 教育が上級レベル学習のメタ言語能力及びバイリンガリズムに与える影響について検証を試みる。また、課題に文学作品を用いることで、原文の文体の再現、あるいは細かなニュアンスを維持しながら和訳表現ができているか等の文学性についても示唆が得られると考えられる。

『日の名残り』からの抜粋文と訳文は以下の通りである。なお、協力者には作品及び作者名が開示されており、下線部分のみの英訳を提示する。

> But life being what it is, how can ordinary people truly be expected to have 'strong opinions' on all manner of things – as Mr Harry Smith rather fancifully claims the villagers here do? <u>And not only are these expectations unrealistic, I rather doubt if they are even desirable. There is, after all, a real limit to how much ordinary people can learn and know, and to demand that each and every one of them contribute 'strong opinions' to the great debates of the nation cannot, surely, be wise.</u> It is, in any case, absurd that anyone should presume to define a person's 'dignity' in these terms. (Ishiguro, 1989: p.204)

> 一般庶民にそのようなことを期待するのは、とても無理というものです。さらには、望ましいことでもないようにー私にはー思われます。一般人が知り、理解できることには、たしかに限界があるのです。そのことを無視して、誰もが国家の大問題について「強い意見」をもち、発言すべきだと主張するのは、とても賢明とは思われません。（土屋、1990: p.280）

この文章は、執事である主人公スティーブンスによる一人称の語りによって展開されており、執事らしいフォーマルな語り口が特徴である。まず、１文目であるが、前半部分に倒置表現が使用されている。また、'I rather doubt' 部分であるが、土屋による訳では、「ー私にはー思われます」とあえて直訳せずにダッシュを用いて強調する形になっ

ている。口語表現にしては大仰な表現である‘rather’をどのように訳すのかがポイントとなろう。続いて、２文目は非常に長く、文章の意味を正確に理解するには、後半‘and to demand’以下の主語と動詞の関係を正しく把握することが鍵となる。また、‘surely’という副詞も挿入されており、これをどのように訳すかも重要なポイントとなる。さらに、‘contribute A to B’という表現が理解できており、適切な日本語に訳されているかどうかも詳しく見ていく。

４．３．１　協力者A

協力者A（母語による読書あり・早期英語教育なし）の和訳は以下の通りである。

> (1) それらの期待は非現実なだけではなく、果たして理想的であるかさえも私は疑問である。(2) 結局、一般人がどれだけ学び、知ることができるかには上限があるし、１人１人に母国に対する議論へ強く主張をしてもらうことを求めるなど、到底賢明であるとはいえない。

この協力者は文章全体の意味を正しく捉え、自然な和訳ができている。特に、文(1)の‘果たして’や、文(2)の‘到底’といった語彙選択は、ある意味文学的響きを伴っており、非常に巧みであると言える。同時に、これらは文意を強調する役割も果たしている。また、協力者の多くが文(2)の‘limit’を‘制限’と訳していたのに対し、この協力者は‘上限’とし、暗に「これ以上は学ぶことができない」という事実を強調できている。この点においても、語彙の選択が非常に技巧的と言えよう。さらに、‘strong opinions’部分をあえて引用句にせずに、‘強く主張してもらう’と訳すことで、‘contribute’という語彙の持つ意味を生かしつつ、より自然な日本語の流れも生み出している。翻訳全体は明瞭であり意味も捉えやすい一方で、スティーブンスの執事口調の再現は十分とは言えない。また、‘nation’を‘国家’と訳すべきところを‘母国’としたところには、やや飛躍しすぎた感があると言えよう。

４．３．２　協力者B

次に、協力者B（英語による読書あり・早期英語教育あり）の和訳について見ていく。

> (1) また、これらの期待が非現実的であるだけでなく、それらを強く望むことも可能なのかということについて私はむしろ疑いたい。(2) 結局、普通の人が学び、知識を得て、このような人の一人一人が国家の重要な討論で「強い意見」を持つことを求めるのは、確かに賢明ではない。

倒置表現や副詞の挿入句‘surely’等は問題なく訳すことができている。また‘to demand’以下の主語と動詞の関係も正しく理解し和訳することができている。しかし、文(1)において、‘強く望む’及び‘可能なのか’は原文にはない表現であり、読者に戸惑い

を与える可能性がある。さらに、‘疑う’と‘したい’を結合させた‘疑いたい’というコロケーションは、不自然な日本語表現であり、原文の正確な訳にもなっていないことから、文(1)の意味を取りにくくしている。また、文(2)における‘a real limit’と‘how much’部分が正確には訳されておらず、原文のニュアンスを再現できていない。しかし、これについては、大まかな文意は把握できるため、意訳との解釈もできなくはない。最後に、‘このような人の一人一人が’という表現については、日本語のぎこちなさ、あるいは意味の重複を感じさせる。また、スティーブンスの格調高い語り口が和訳に生かせておらず、文学的文体の再現は難しかったと言える。以上のことから、この協力者の日本語訳における表現や語彙選択において、全体的に改善の余地が残る結果となった。

４．３．３　まとめ

協力者Aにおいては、文法事項を正しく理解し、全体的に正確かつ自然に和訳ができていた。一方、協力者Bの和訳については、日本語原文の意味の取り違えによる不正確な訳文やぎこちない日本語表現等が見られた。協力者Bのエッセイにおけるパフォーマンスの高さと比較すると、L1/L2運用能力間のギャップを感じさせる結果となり、幼少期のL1による読書不足が日本語の文章読解力に及ぼす影響を示唆している。両名とも倒置、挿入句といった技巧的表現につまずくことなく、正確に訳することができていた一方で、この作品の最大の特徴でもある、執事によるフォーマルな語り口や文学的要素等を十分に生かすことは難しかった。これについては、スティーブンスの属性に関して協力者に知らされていなかったことから、英語課題の問題文のみでは情報が少なすぎる、あるいはこの小説に対する背景知識不足等の原因が考えられる。また、協力者Bは協力者全体の中でも最年少であり、他の協力者とはL1/L2の学習歴に大きな違いがあることも事実である。したがって、今後の学習機会の増加や習熟度の伸び等も考慮しながら、他の協力者と比較していくべきであろう。

５．結び

本研究の２つの問いのうち、①早期外国語教育の効果に関しては、英語的発想でのアウトプットや慣用表現の自然な使用等、協力者のパフォーマンスに早期英語教育の（好）影響が見られる部分があった。次に、②幼少期の母語教育の外国語習得への影響についてであるが、母語能力が英語表現においての論理的展開など、幼少期のL1での読書が日本語の文章読解力に与える影響が示唆された。しかし同時に、日本語の熟達度の高い学習者が英語的発想で表現することが困難な場合があることも分かった。この点については、日本語のスキルを英語に変換するためのプロセスや学習法に関するさらなる研究が必要であると考えられる。英訳においては、両協力者ともに、ややぎこちない表現やコロケーション等が見られた。また、早期外国語教育の有無にかかわらず、文学作品における自由間接話法の適切な解釈が難しい一面が明らかになった。このような文体的技巧は、自然と習得することが難しく、文体に関する知識を指導する重要性が明確になった。さらに、和訳においても文学的文体を生かしつつ、正確で自然な訳をすることが困難で

あることが分かった。特にL1による読書経験の欠如が不自然な日本語の使用に繋がったと考えられることから、母語で培われたメタ言語能力の積み上げによって、相乗的な学習効果が期待されるのではないかと推測される。

今後は、より包括的なデータを収集し、本研究の発見や主張を補強するとともに、ライティングや英訳・和訳以外の技能も含めた総合的な英語運用能力の調査・分析を通じて、早期英語教育及び母語教育の効果や問題点の検証を行う必要があるだろう。

注

1）アンケートでの質問は以下の通りである。

問１．幼児期・小学生の頃、読書（電子版を含む）が好きでしたか？どのようなものを好んで読んでいましたか？

問２．小学生の頃、作文は得意でしたか？

問３．英語を学び始めたのは、いつですか？

問４．今現在、英語は得意ですか？英語ではどの分野が得意ですか？

問５．現在、英語にどれくらい触れていますか？

問６．持っている資格がありましたら、ご記入ください。

引用文献

秋田喜代美、斎藤兆史、藤江康彦 編（2019）『メタ言語能力を育てる文法授業：英語科と国語科の連携』、ひつじ書房.

猪原敬介（2016）『読書と言語能力』、京都大学学術出版会.

大津由紀雄（2007）『英語学習７つの誤解』、日本放送出版協会.

大津由紀雄（2018）「ことばの教育としての外国語教育」『新英語教育』、第587号、7-9.

斎藤兆史（2000）『英語の作法』、東京大学出版会.

斎藤兆史（2017）『めざせ達人！英語道場』、筑摩書房.

Nasu, M. (2017) *From Individual to Corrective*. Bern: Peter Lang.

豊永耕平・須藤康介（2017）「小学校英語教育の効果に関する研究－先行研究の問題点と実証分析の可能性」『教育学研究』、第84巻第２号、215-227.

豊田昌倫、堀正広、今林修（編）2017『英語のスタイル』、研究社.

鳥飼玖美子（2020）「教育交差点 小学校英語教科化」『山陽新聞』１月17日朝刊17面.

Boase-Beier, J., Fisher, L., and Furukawa, H. (eds). (2018) *The Palgrave Handbook of Literary Translation*. Cham: Palgrave Macmillan.

Djigunović, M. (2010) 'Starting age and L1 and L2 interaction'. *International Journal of Bilingualism* 14(3): 303-314.

Yoshida, A, Teranishi, M., Nishihara, T., and Nasu, M. (2022) 'The Impact of L1 on L2: A Qualitative Stylistic Analysis of EFL Learners' Writings'. In *Pedagogical Stylistics in the 21st Century*, (eds). Zyngier, S. & Watson, G. 343-369. Cham: Palgrave Macmillan.